

ポスト資本主義社会の文化的矛盾

The Cultural Contradiction of Post-Capitalist Society

正慶 孝*

「ファウストの人間」の誕生

明治の文豪、鷗外森林太郎は、ゲーテの『ファウスト』を邦訳し、ヨーロッパ近代とは何であるかを日本人に啓蒙しようと試みた。大正二年のことである。そのなかにファウストが独白する次のような一節がある。

一體この世界を奥の奥で統べてゐるのは何か。
それが知りたい。そこで働いてゐる一切の力、一切の種子とは何か。
それが見たい。

このファウストの台詞こそ、近代ヨーロッパ人や、それを模倣してきた日本人を含めた近代人の精神を端的に示している。このファウストのように、「もっと、もっと」(mehr und mehr) という精神、「無制限の

無条件の顧みることなき」衝動は、ファウストにちなんで「ファウストの衝動」(der faustische Drang) とか「無限の衝動」(progress ad infinitum) とよばれる。この「ファウストの衝動」は、経済活動の面では富が「多ければ多いほどよい」という観念を生み、近代社会においては富の追求が優先順位の最も高い到達目標となった。こうして、近代人は、「グロースマニア」(成長病患者)として、あるいは「アニマル・ラボランス」(働く動物)として、「マモンの神」(富の神)に全身全霊奉仕するようになったのである。

「マモンの神」が玉座についたのは、ルネサンス、航海革命、宗教改革によって、人間が魔術から解放され、経済活動が自由に営まれるようになった近世以降、換言すれば、「利得の観念」が神の信仰の代替物となり、「神中心」の社会から「富中心」の社会が到来してからのことである。このような時代をヴェルナー・ゾンバルトにならって「経済時代」(das ökonomische Zeitalter)とよぶことができよう。ヴェルナー・ゾンバルトによると、「経済時代」とは「…経済が、経済的利益が、したがってまたこれに関連していわゆる『物質的』重要性が、他のあらゆる価値に対して優位を要求し、また獲得して、そのため経済のもつ特性が、他のすべての社会、文化の領域を特質づけている…」時代のことである。

「…経済的利益そのものの優位…」の時代である「経済時代」は、経済的利益があらゆるものの優位に立ち、これに従属させる圧倒的な力をもっている。「経済時代」は、利潤の追求をライトモチーフにして、ますます進展し、かつてどの時代にもみられなかった拡がり、大いさ、力をもった経済を生み出すことに成功した。それは経済ばかりでなく、文化も政治もなにもかも根柢からかえてしまった。政治的には「大衆民主

主義」(マス・デモクラシー)が実現し、文化的には一部特権的な人々になわかれていた「高級文化」(ハイ・カルチャー)に対し「大衆文化」(マス・カルチャー)が成立した。のちには、「経済時代」が発展し、「豊かな社会」になっていく。このように、「ファウスト的衝動」にもとづいて活動する人間類型を「ファウスト的人間」とよぶことができる。

「ファウスト的人間」は、何事も「無限の衝動」に導かれて行動する人間であり、一方では「ホモ・ファアーベル」(工作的人間)として、他方では「ホモ・コンスメンス」(消費的人間)として振る舞うこととなる。「ホモ・ファアーベル」というのは、人間の本質を「道具をつくる動物」であることに着目した概念である。マックス・シェーラーやアンリ・ベルクソンなどは人間が「ホモ・サピエンス」であるのは、「ホモ・ファアーベル」であることによると述べている。もちろん、この道具のなかには、「コミュニケーション」の道具としての言語も含まれる。

「ホモ・ファアーベル」としての人間は、マルクスによって「新大陸における最初の偉大な経済学者」とよばれたベンジャミン・フランクリンのような人物によって代表される。ベンジャミン・フランクリンは、のちの時代のマックス・ヴェーバーもまた、典型的な「資本主義的人間」としてとりあげている。「最初のミスター・アメリカン」である。

かれは『自伝』⁽²⁾のなかで人生に成功するには、次の十三の徳目を守り、努力することが必要である、と述べている。その徳目とは、(1) 節制、(2) 沈黙、(3) 規律、(4) 決断、(5) 節約、(6) 勤勉、(7) 誠実、(8) 正義、(9) 中庸、(10) 清潔、(11) 平静、(12) 純潔、(13) 謙讓である。

フランクリンは、この徳目にもとづいて「時間は貨幣であることを忘れてはならない」とか「貨幣は繁殖し子を生むものだとすることを忘れ

てはいけない」とか「信用に影響を及ぼすことは、どんな些細なおこなでも注意しなければいけない」などの忠告を青少年に対して行っている。これらの人生訓が、「プロテスタントイズムの心情倫理」と同じであり、それが「資本主義の精神」となって、資本主義発展の原動力になることは、マックス・ヴェーバーの名とともによく知られていることであろう。営利の追求が目的ではなく、フランクリンの忠告のように、職業生活を「合理的に営むこと」(Beruf)の結果として利潤があたえられるというのが、「資本主義の精神」である。この精神を文字通り体現している人物が、ベンジャミン・フランクリンであった。ベンジャミン・フランクリン自身は理神論者でプロテスタントではなかったけれども、彼は故地のニューイングランドのピューリタンの文化に充分影響を受けていたので、彼の思想と行動はプロテスタント的であったのである。

インダストリアルマンの出現

「工業社会」(インダストリアル・ソサエティ)の成立にあたって重要な精神的原動力になったのは、「プロテスタント」的な「心情倫理」(エートス)であった。日本の近代化もこれの例外ではなく、プロテスタント的な経済文化を採り入れることによって遂行されてきた。科学技術の導入や経営管理の方法の導入などにみられるのは、「効率性」(efficiency)や「生産性」(productivity)を重視した、ベンジャミン・フランクリン風の流儀であり実践であった。これは無意識的にはあるが、日本がプロテスタント的な文化に影響を受けてきたことを意味する。「論語」と「算盤」の一致を説く「儒教資本主義」を唱えた澁沢榮一の「実業思想」も、「利潤自体が目的ではなく、努力した結果の報酬として

利潤があたえられる」と説くことにおいて、フランクリンの思想とよく似ている。また、ピューリタンの信条とされる「天はみずから助くるものを助く」という諺は、同時に明治初期の実業家にみられた信条でもあった。幕末に幕府留學生の監督として訪英した西村正直が訳したサミュエル・スマイルズの『西国立志編』(原題『セルフ・ヘルプ』)の冒頭には、「天はみずから助くるものを助く」のピューリタンの諺がかかげられている。これが明治の実業家のモットーになった。

近代の産業社会の担い手は、「天職(Beruf あるいは calling) 意識」にもとづいて職業生活を営む人びとであった。産業あるいは工業のことを英語では industry という。これは「勤勉な」を意味する形容詞の industrious からきている言葉である。また、企業や商売を意味する business は busy+ness であり、「忙しい」ことを意味する。さらに、商談とか交渉を意味する negotiation も neg(否定の接頭語 neg) と otium(暇を意味するラテン語)の二語からなっている。これは「暇ではない」というのがもともとの意味である。以上の三語から推測できるように、「工業社会」は、「忙しい社会」という意味なのである。

したがって、近代人は、古典古代の自由な市民のように、「スコレー」(高貴なる閑暇)を享受できるような「有閑階級」ではなく、絶えず時間追われ、時間を気にしながらビジイに時を過ごすことになる「ビジネスマン」(多忙な人間)あるいは「インダストリアルマン」(仕事人間)になってしまったのである。古典古代のポリス市民は、生産に従事せず、弁論や観劇や談話に大部の時を過ごした「スコレー」市民であったのに対し、近代や現代の市民は、ビジネスに従事する「ビジネス市民」である。かれのもっとも気にかけることは、「デート」(日付)であり、「アポイントメント」(会合の約束)である。かれは時間におわれ、

時間を消費し、時間を過ごすことがあっても、時間を享受することはない「多忙な人間」であり、「ワーカホリック」(働き中毒患者)である。かれらには「自由できままな時間」を意味する「レジャー」(leisure)はあたえられてはいないのである。

このようなライフ・スタイルが出現したのは、「最初の工業国家」である英国での産業革命以後のことである。現代の産業社会の端緒をあたえた英国産業革命の推進者の多くは、勤勉な職人階層の出身者で、かれらが最初のインダストリアルマンとなった。蒸気機関を発明した時計師ワット、糸系機械を発明した理髪師アークライト、汽船を発明した宝石師フルトンなど、いずれも勤勉な職人階層出身のインダストリアルマンであった。このインダストリアルマンの原型は、「手」と「頭」、いかえれば大脳と大脳の延長である手とを統一した「万能の天才」であるレオナルド・ダ・ヴィンチのようなルネサンス期の天才である。いかえれば、産業革命は大脳と手とが統合したルネサンス期に準備されていたともいえるのである。今日頻繁につかわれる「テクノロジ」(科学技術)あるいは以前からある「テクニク」の「テクノ」は、ギリシア語の技巧を意味する「テクネー」(technē)に由来する。また、「デジタル」(digital)は指(digit)を「マニユアル」(manual)は手を意味する「マヌス」(manus)にその語源をもつ。いずれもラテン語である。リベラル・アーツ(自由学芸)重視の中世的世界にかわる近世的世界はメカニカル・アーツ(機械学芸)重視の世界になっているのである。ベンジャミン・フランクリンは実在の人物であったが、虚構上の人物であるロビンソン・クルーソーもまた、典型的な「資本主義の精神」の体現者であった。ダニエル・デフォーは『ロビンソン・クルーソーの奇妙で驚くべき冒険と生涯』³⁾のなかでこの人物を近世の経済活動を推進

してきた「企業家精神」(entrepreneurship)の持ち主として描いている。漂流者ロビンソン・クルーソーは、単純な漂流者ではない。驚くべきことに彼は漂流してからの日記を「複式簿記」の方法でつけている。すなわち、毎日あったよいこと(good)とわるいこと(evil)とを借方と貸方とに分けて記入する。これだけでももう充分に事業家である。また、消費と貯蓄あるいは投資との資源配分を考慮しながら行動する。彼は難破した船に残っている資財を陸に持ち帰り、それを資本として活用する。また、みずからの厚生と慰安を極大にするため、労働力を最適な形に配分する。このようにこの小説の読者は、ロビンソン・クルーソーの経済活動すなわち漂流生活の「合理化」のなかに、「ファウスト的衝動」につき動かされ、コスト(犠牲すなわち費用)を極小にするとともに、リターン(報酬)を極大することを目標とする経済主義を完璧な形で実現しようとするインダストリアリズムの精神を前提にした人間設定がなされていることを、発見するであろう。

いかなる時代もいかなる場所においても、経済問題は、代替的諸用途(alternatives)をもつ諸手段が稀少(scarcity)のために、諸目的を実現するにあたって、いかにそれらの諸手段を最も効果的に配分するかという形で発生する。ロビンソン・クルーソーの行動は、この経済問題の解決法を示唆しているのである。

まず、彼は、経済的諸資源——船のなかに残っていた小麦とか鉄砲とか弾薬とかの必要な資財(ストック)を運び出して来る。これらの稀少な資財を労働力と結び合わせることによって、与えられた条件下で自己の生存をもっともよく維持していくよう努力する。この生活の方法すなわち制約条件下の極値問題を解くという方法のなかに見い出されるのは、目的合理的な生活態度であり、ここに「企業家精神」を発見できるので

ある。クルーソーは、みずからの労働力の配分において、相対的重要性に応じてその配分を行なっている。その配分を測定するのに必要なのは時間の測定であるが、その手段もみずからの工夫と創意によって、生み出している。しかも、こうして測定された労働力の配分が充分に合理的であったかどうかを反省するために、前記のとおり複式簿記の方法で日記をつけている。

さらに興味をひくのは、小麦をたんに消費することなく、生産手段として用い、播いて増やして食べるという、拡大再生産(経済成長)を可能ならしめる投資ないし「時間」を通じての資源配分を行なっていることと、将来の不確実性を考慮して、保険をかけていることである。そこには、家や同族や郷党閥などに頼ろうとするような「パターナリズム」(温情主義)の期待や「甘えの構造」は微塵もみられず、独立自尊の生活態度、個人主義の思想、あるいは自力更生の思想が発見されるのである。

ロビンソン・クルーソーの合理主義とは、マルクスのいうとおり、「必要そのものに迫られて、自分の時間を自分のさまざまな機能のあいだに正確に配分」し、彼の総活動において、どの機能がどれだけの位置を占めるかも、「所期の有用的効果を達成するために克服されるべき困難の大小によって定まる」という原則によっている。ロビンソン・クルーソーも、ベンジャミン・フランクリンのように、それまでの実業家にも宗教家にもみられない新しいライフ・スタイルをもった人物であった。

新しいライフ・スタイル

ライフ・スタイルと言う語は、フロイトと同様、ウィーンで生まれた

ユダヤ系の精神分析医でフロイトの僚友であった、アルフレッド・アドラーが、個人のマナー、態度、抱懐する意見などの類型化された一貫した態度のことを意味するために造語した *Lebens Stil* がその原語で、これが英語に翻訳されてライフ・スタイルとなったのである。たとえば、優柔不断でいつも悩んでいる「思索型」を「ハムレット型」とよぶならば、後先を考えずに行動にはしってしまう「行動型」を「ドン・キホーテ型」とよぶことができる。このように類型化された人間類型がライフ・スタイルである。サド型対マゾ型、カサノヴァ型対ドンファン型など、文学作品の性格（キャラクター）からもライフ・スタイルはさまざまに区別することができる。

近代人の精神を体现しているライフ・スタイルは、「ファウスト的衝動」に導かれた「ファウスト的人間」であった。「ファウスト的人間」は、先にあげたように、「もっと、もっと」を追求する「インダストリアルマン」であり、「ホモ・ファーベル」であった。これらの「インダストリアルマン」は、合理主義の精神に導かれて、巨大な生産力を解放していった。中世人が巨大なドゥーム（教会）を建てたのに対し、近代人は巨大なプラントや摩天楼を建て、「経済時代」のシンボルとした。「祈ること」より「もうけること」の表現である。

初期の資本主義の段階には、前述のとおり、経済活動の「心情倫理」は、「プロテスタンティズム」的であった。それが経済が発展するにつれて、徐々に失われて「営利の追求」それ自体が、目標になっていく。「もっと、もっと」利潤を追求することが、目的となってしまふと、それはもはや宗教的倫理からの制約は弱くなり、「営利主義」が擡頭するようになる。しかも、「自由放任」の経済体制のなかで、営利が最大限に追求されるようになる。かつて、アリストテレスは、経済を「オイコ

ノミア」（家政術）と「クレマティステイケ」（貨殖術）に分けたが、ある時期からの資本主義は「クレマティステイケ」を追求するようになり、「無制限の無条件の顧みることなき」営利の追求が、資本主義を駆動する精神と化していく。それが現代資本主義の特徴である。こうして、初期資本主義のもっていた「プロテスタンティズムの倫理」にもとづく「資本主義の精神」は失しなわれ、「極大利潤」を追求することそれ自体が目的と化し、資本の集中・集積が進み、巨大な生産力体系をもつビヒモス（巨獣）が誕生することとなる。

巨大な生産力と消費力

巨大な生産力体系をもつことに成功した現代資本主義は、大量生産（mass production）のシステムを完成した。しかし、これに対応する大量消費（mass consumption）の仕組みをつくりあげなければ、絶えず過少消費恐慌に陥ってしまう危険性をもっている。これを避けるためには、「現代人」を生産の側面では勤勉でよく働く「ホモ・ファーベル」であるとともに、消費の側面では忙しく消費する「ホモ・コンズメンス」（homo consumens）あるいは「新しい物好き」（neophilia）にしていく必要がある。二十世紀が「マーケティングの時代」とよばれるのは、巨大な生産力に対応する販売の仕組みを構築することに大きな努力が払われたからである。市場調査、販売促進、商品化計画、消費者信用、過剰包装、モデル・チェンジ、製品寿命の陳腐化の促進、広告宣伝などの手法が次々と開発され、「マーケティング」はみるみるうちに拡大していった。これには、「所得革命」と「福祉国家」の進行が寄与した。「所得革命」と「福祉国家」の進行は、所得の平準化を進めて貧富の差を縮小

し、マルクスのいうようなプロレタリアの「絶対的窮乏化」および「相対的窮乏化」が阻止された。逆に労働者の実質賃金は上昇し、中間階層が増大していった。

このようにして、「ホモ・コンスメンス」(消費的人間)が生まれる。資本主義とプロテスタンティズムの共存していた時代は、節儉と勤勉は資本の蓄積のために欠かせないものであった。ところが、資本の蓄積が進み、生産設備が巨大なものになると、節儉は美德でなくなり、消費こそが美德となる。ここで、経済倫理が逆転するのである。ケインズ経済学は、有効需要の原理がその核心におかれているが、有効需要を造りだすためには浪費もまた可なりなのである。現代人は生産者としては「浪費をつくる人」として、消費者としては「浪費を競う人」として行動することになる。

「豊かな社会」とは、「浪費社会」である。ケインズが解こうとした問題は、「豊富のなかの貧困」(poverty in the midst of plenty)の問題であった。これは一方に膨大な潜在的供給能力があるのに、それが実現しないのは、他方にそれに見合う需要がないために発生する。供給に応じた需要があれば、ゆたかな生活が実現できるので、そうならないのは経済活動を政府が何もせずに自由放任にしているからだということになる。その解決策は、自由放任の経済システムをやめて、政府が経済活動に積極的に干渉・介入し、投資の社会化を行なうことによって、初めて可能となる。これがケインズの発想にある基本思想であった。投資とともに重要なのは、消費であるが、これも大いに消費を奨励して、有効需要を高める必要がある。そのためには、「より多くもち、より多く使うこと」のみに専念する「消費者をつくり出す必要がある。「もっと、もっと」と浪費する消費者「ホモ・コンスメンス」の登場が促されるのである。

こうして、プロテスタンティズムの禁欲的なライフ・スタイルから消費を楽しむヘドニズム(快楽主義)のライフ・スタイルにかわってしまったのである。経済活動におけるヘドニズムの成立は、一九〇八年、ヘンリー・フォードがT型フォードを発売したところから、このころから貯めてから買うことから買ってから払い始める時代すなわちヘドニズムの消費の時代が始まっている。

対抗文化の登場

ヘドニズムの資本主義は、前述したようにヘンリー・フォードのような「キャプテン・オブ・インダストリー」(産業の将帥)によって推進されてきた。彼らには欲望だけではなく、愛もあった。もっともその愛とは「事業愛」であり「貨幣愛」である。その愛も尋常ではなく、「もっと、もっと」事業を拡大する愛であり、貨幣を「もっと、もっと」追求する貨幣愛である。この「貨幣愛」こそが、資本主義の発達に拍車をかけていった動機である。

しかし、この思想には重大な陥穽があった。「もっと、もっと」事業を追求するにせよ、限度があるということである。採掘できる資源にも浪費された結果の廃棄物を捨てる場所にも限度が厳然と存在する。このことはすでに一九七二年にローマ・クラブの報告書として発表されたメドウズMIT準教授らの『成長の限界』、英国の雑誌『エコロジスト』に掲載された『生き残るための青写真』、シッコ・マンズフォルト元EC委員長の書簡「人類生存と経済政策」などによって指摘されてきている。また、同じ一九七二年には、「かけがえない地球」(Only One Earth)を守れ、をスローガンにして「第一回国連人間環境会議」がス

ウェーデンのストックホルムで開かれたことや、その二十年後にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで国連環境開発会議が開かれたことは、よく記憶されていることであろう。最近では、「持続可能な成長」(sustainable growth)とか「ナチュラル・キャピタリズム」(エイモリー・B・ロビンズ)などの提言がなされている。

これら環境に対する関心は、「もっと、もっと」を追求する「ファウスト的衝動」にもとづいて経済活動を営むことは、もはやできなくなっただことを示しているのである。このことを別の形で示したのが、「対抗文化」(counter culture)の形成であった。

一九六〇年代後半に先進工業国の大都市でみられた「キャンパス・ウォー」(学園紛争)は、同時に「アンチ・ビジネス」運動の色彩ももっていた。ワールド・エンタープライズ(世界企業)とかマルチ・ナシヨナル・カンパニー(多国籍企業)とかよばれるビッグ・ビジネスが世界各地でプラントを建て、あるいは営業所をつくり、多くの地域の人々の経済生活を支配するようになってきているのが、現代経済の特徴である。それらはかつての帝国主義支配のように、多くの人々を従属させ支配して人々の運命すらも決定しかねない権力を手にしている。こうした、ビッグ・ビジネスのパワー(権力)に対し、敢然とノンと異議を申し立てたのが、カンター・ペーリング・パワー(拮抗力)としてのアンチ・ビジネス運動であった。それは新しいチャーチスト運動であり、あるいは宗教改革運動でもあった。「アンチ・ビジネス」運動は、公害反対運動、企業の情報公開を求める運動や株主訴訟などの形態をとっているけれども、スチューデント・パワーの運動とともに、「ファウスト的衝動」に導かれてきた近代がかかえている諸問題を、いかにして解決すればよいのかの問題提起でもある。

「豊かな社会」の最大の享受者によって提起された「高度大衆消費社会」への告発は、豊かさを手に入れるかわりに、「メガマシン」(巨大機械)となってしまった国家や企業のなかで「自己疎外」に陥ってしまった「組織のなかの人間」の悲痛な叫びでもあった。

ところで、「メガマシン」は、三つのBによって表わすことができる。すなわち、「巨大政府」(Big Government)、「巨大企業」(Big Business)、「そして」巨大技術体系」(Big Technology)である。この三つのBの体制に向かって、「コンテスタシオン」(異議申し立て)をつづける「コンテスタトル」(異議申し立て者)の姿は、あたかもゴリアテに立ち向かうダビデのようでもあり、また風車に突撃するドン・キホーテのようでもある。

しかし、それは「新しい宗教改革」運動ともいえるのである。三つのBの体制のなかで人々は、三つのAの状態に陥っているからである。三つのAとは、Apathy(無関心)・Anomie(無規範)・Atomization(原子化)である。人々は、連帯や共同意識をもてなくなり、「孤独な群衆」となっているのが原子化のAであり、また、なにごとにも関心をもてなくなっていることが無関心のAであり、機械化や管理社会の進行によって、人間が「自動機械」(オートマン)のようになっていいるため、規範的なものが失なわれていっているのが無規範のAである。犯罪を始めとする社会病理の蔓延は、その端的な表われである。三つのAが現代の特徴である「アナキー」(Anarchy)状態を生んでいるのである。

機械化や管理社会化は、エレクトロニクスや通信手段の発達によってもたらされたものであった。すなわち、三つのCによってこれを示すと、Computation(計算)・Control(制御)・Communication(通信)であって、これらによってCybernation社会が出現したのである。こ

のため、人間の労働に関し、ふたたび「シーシュポスの神話」の世界が現出した。ギリシア神話に出てくるシーシュポスは、神々の怒りにふれてある罰をあたえられる。その罰というのは、岩を山の頂上にまで運ぶという労働である。ところが、岩を山頂にまで運びあげると、岩はそれ自体の自重でいつでも落下してしまう。シーシュポスの労働は、したがって永遠に終わることがない。神々はもっともおそろしい懲罰をシーシュポスに課した。この世で無益で希望のない労働ほどおそろしいものはないからである。⁽⁵⁾

「サイバネーション社会」での労働は、労働をシーシュポスの懲罰にかえている。リアリティ（現実）とバーチャル・リアリティ（仮想現実）との区別がなくなり、自己喪失が進行しロボットのようになっていく。カレル・チャペックによって描かれたロボットの世界は、最後にロボットたちの反乱で終わっている。この作品が示唆するように、組織的ではあるがアナキーな異議申し立てが、一九六〇年代後半にみられた運動の底流にはある。

しかも、サイバネーション社会は、「テクノクラシー」支配の管理社会である。これを容易にしたのも、エレクトロニクスの発達であった。テクノクラシーとは、セオドオ・ローザックによると、「統治するものが、専門技術者に訴えて自らを正当化し、専門技術者は専門技術者でまた科学知識によって自らを正当化する社会」⁽⁶⁾である。テクノロジが発達すればするほど、テクノクラシーも強化されていく。現代社会は、この傾向を一段と強めている。J・K・ガルブレイスは、ひとつの組織のなかのテクノクラシー支配を「テクノストラクチュア」とよんだが、この構造は国家のレベルにまで及んでいるのが、現代のテクノクラシーである。

しかし、テクノクラシーが支配する「メガ・マシン」にたいする、対抗文化も生まれている。それがNGOであったり、ボランティア活動などである。これらの運動は、近代を支配してきた「ファウスト的衝動」にもとづく「巨大化趣味」(gigantism あるが巨匠主義)にたいする積極的な否認である。

「ファウスト的文化」の原産地である西ヨーロッパからもE・F・シューマッハのように、『スモール・イズ・ビューティフル』⁽⁷⁾の提唱もでている。シューマッハ自身はこの主張を「仏教経済学」とよんでいる。このような形での「対抗文化」が大きくなっているのが、現在の状況である。

新しい「宗教改革」を求めて

いままで述べてきたように、現代を導いてきた精神的原動力は、「ファウスト的衝動」であった。しかし、これはこれ以上追求できない状況に陥っていることは、環境問題や資源の枯渇問題だけをとっても、明白である。われわれの惑星は「成長の限界」に達しており、いままでのように、無制限のフロンティアをイメージする「カウボーイの経済」を追求することができない。その代わりにクリーンでリサイクル可能な生産体系をもつ節度ある経済システム「宇宙船地球号」の経済を構築しなければならぬ。労働も無益で希望のない労働ではないものにかえていかなければならない。前述したように、職業生活の革新によって、近代経済が形成されたのであるが、これがいつの間にか科学技術の進展とともに、苦役と化してしまったのが、今日の課題であった。宗教改革が新しい社会の「エートス」を生んだように、現代もまた、新しい宗教改革が

もとめられているのである。それはかつてオーギュスト・コントが提唱したような「人類教」であろう。しかも、新しい宗教改革は、「ファウスト的衝動」にもとづく「成長教」にとってかわる「反成長教」である。それは本来の意味での「スコレー」(高貴なる余暇)を取り戻すことを宗旨であるところの信仰である。

そうでなければ、われわれは、「この世の終わりの日」(Doomsday)を迎えてしまう。それを避けて「楽園回復」(Paradise Regained)の道をたどるためには、「ファウスト的衝動」を克服し、それにかえて限度ある「成熟社会」を築きあげる必要がある。そのための科学知識や経済的条件はととのっている。あとは、意欲と智慧とである。

注

- (1) W・ゾンバルト『ドイツ社会主義』(難波田春夫訳、早稲田大学出版部、昭和五十七年)。
- (2) ベンジャミン・フランクリン『フランクリン自伝』(松本慎一・西川正身訳、岩波文庫、昭和三十二年)。
- (3) ダニエル・デフォー『ロビンソン漂流記』(吉田健一訳、新潮文庫、昭和四十七年)。
- (4) K・マルクス『資本論(第一巻)』(長谷部文雄訳、青木書店、一九五七年)。
- (5) アルベール・カミュ『シーシュポスの神話』(清水徹訳、新潮文庫、昭和三十年)。
- (6) セオドア・ローザック『対抗文化の思想』(稲見芳勝・風間禎三郎訳、ダイヤモンド社、昭和四十七年)。
- (7) E・F・シューマッハ『スモール・イズ・ビューティフル』(小島慶三訳、講談社学術文庫、昭和六十年)。